

済的には colonial type であったこと、第二は、人口増加率が日本よりはるかに高かったこと、しかも第三に気候的要因が経済人としての活動を阻害しているのではないかとのこと。いずれも示唆にとむ見解だと思われる。

わたくしは、本書の価値はもちろんだが、こうしたシンポジウムが開催され、その成果が出版されたそのことを高く評価したい。(本岡 武)

**Maung Maung: A Trial in Burma, The Assassination of Aung San, Martinus Nijhoff, The Hague, 1962. vi+117p.**

ビルマで7月19日は Day of Martyrs, 1947年のこの日に暗殺されたオン・サンを国をあげて追悼する。1961年のこの日、たまたまシャン州の首都タウンジーに滞在していたわたくしは、グラウンドに市民・学生生徒が集まって静かにオン・サンをしのぶ大集会に出席し、強い感銘をうけたことを思いだす。政府のオフィスは、ときの大統領や首相の写真がかかかなくても、必ず軍装のオン・サンの肖像がかかっている。まさに、オン・サンは建国の父として永遠に追憶的となっている。

このように神格化されているのは、かれがビルマ建国にはたした役割による。しかし同時に、齢わずかに32才、ビルマ独立に先だつ半年前、ラングーン総督府の一室で、かれの新閣僚たるべき同志と会議中、かつて首相の経験のあるウ・ソーの一味によって、白昼殺されたという、ビルマ近代史上最大の悲劇にもよるであろう。

現在ビルマのすぐれた法律家であり、また Burma's Constitution, Burma in the Family of Nations などによって、ビルマ問題の著作家として世界的に知られているモン・モン博士が、ウ・ソー一味の裁判記録をもととして、オン・サン暗殺事件の経過を明らかにした。この事件は、ビルマの政治過程を理解するひとつの鍵であるだけに、いまここに客観的に事件の経過を裁判記録にもとづいて分析された本書のもつ意味は大きいと思われる。

本書は裁判記録を第3章以下にあて、第1章はオン・サン、第2章はウ・ソーの略歴にあてている。オン・サンのことはよく知られているが、ウ・ソーはあまり

知られていない。戦争前に首相となり、勃発直前ロンドンに独立交渉にわたり、勃発とともにイギリスによってアフリカで抑留、終戦後ビルマに帰り、ついに死刑に処せられたウ・ソーの数奇な運命を見ても、また、なぜかれがオン・サンを暗殺することによって政権がとれるとイージーに考えたかということを見ても、つくづくビルマの政治構造だけでなく、ビルマ人そのものの personality や behavior を考えさせられる。政治問題には素人であるわたくしにとって、本書は推理小説のおよびもつかない迫力をもっている。まさに事実は小説より奇なりだ。

わたくしは、著者モン・モン博士をエール大学にたずねたことがあるが、博士はちょうどこのとき visiting lecturer としてのニュー・ヘブレンでの研究生活を利用して本書を執筆されていた。博士のラングーンにおける生活を思うとき、交換教授としての生活で本書を書きあげたことを喜びたいと思う。(本岡 武)

**Atlas of South-East Asia, Djambatan, Amsterdam, 1964. 84p.**

東南アジアのまとまった地図帖は、東南アジア研究者の間に渴望されていた。東南アジア全域についてはもちろんのこと、各国別の地図帖も初等・中等教育程度以外のものは全然刊行されていない。唯一の例外は、戦争直前インドネシアについてまとめられた *Atlas van Tropisch Nederland*, Topographischen Dienst in Nederlandisch-Indië, Batavia, 1938 だけである。(この熱帯蘭領地図帖は、かなり古くなっているが、今日においても最高水準をゆくものであることを付記しておきたい。)

このたび、*Atlas of the Arab World and the Middle East* を刊行したアムステルダムのジャムバタン社より、これと同じ種類の地図帖が東南アジアについて刊行されたことは、まことにありがたい。

本地図帖のサイズは 25×35cm。表紙と裏表紙の見開きに、東南アジアの歴史地図が8図に収められている。主要なのは5色版で60ページにわたっての東南アジア全域・フィリピン・インドネシア・シンガポール・マラヤ・タイおよびインドシナ3国のそれぞれについての、一般図としての地形図のほか、特殊図としての気候・植生・地質・土壌・政治・人口・民族・土地

利用・産業・交通等の地図、あるいは特定の主要地域については詳細図、首都については都市計画図がおさめられている。そのあと、24ページにわたるロンドン大学 D. G. E. Hall 名誉教授の東南アジア史概説が、多数の写真いりで、加えられている。そして最後に地名索引7ページがある。

この内容から明らかなように、地形図だけでなく、多数の特殊図がおさめられていることを特色とする。だから、本地図帖は自然・民族・産業その他の東南アジアの地理学的特徴を明らかにするのに非常に効果的である。しかも、これにその道の最高権威ホール教授の東南アジア史概説が加わることによって、東南アジア研究の入門書としての意義もきわめて大きい。

しかも、製版・印刷・製本などの地図帖作成の技術はすばらしい。さすがにオランダの出版物だけのことはある。ちょっと非のうちどころがない。とにかく、見ていて飽くことをしらない、たのしい、またおもしろい地図帖である。その詳細なインデックスとあいまって、東南アジア研究者のまさしく座右に置かれるべき地図帖である。推奨してやまない。

ただ、これは atlas であって map でない。たとえば、タイは1/450万の縮尺で示されている。だから実用上不便な点があるのも当然である。しかし、現在東南アジア全域にわたって、米空軍の作成した1/100万がある。これは容易に入手利用できる。さらに、それより縮尺の大きな地図は東南アジア各国からそれぞれ自国について刊行されている。たとえばタイの1/25万などはすばらしい。だから、本地図帖はどこまでも atlas としての目的をもっており、map としては、いくらでも補いのあることを銘記しておきたい。

わたくしは、前号で紹介したフィッシャー教授の東南アジア地理、そしてこの東南アジア地図帖の刊行こそ、東南アジア地理にかんする最近の発展ぶりを如実に示すものだと思う。貴重な業績である。

(本岡 武)

*Der Kampf der Götter und Dämonen, aus dem thailändischen Ramakien übertragen von Ch. VELDER, Schweinfurt, 1962. 322p.*

タイの民族詩として有名な『ラマキエン』の全訳である。この叙事詩については、これまで René Nico-

LAS: *Le Ramayana siamois, Revue indochinoise*, 1928 ほか一・二の文献しか知られていなかったのであるが、いまここに全訳が刊行されたことは誠によることと云わねばならぬ。

インドの大叙事詩『ラーマヤナ』Ramayana は、のちにインドの国民的英雄となり神として崇められたラーマ王子の武勇譚であるが、それだけにインドにおいては勿論のこと、インド文化の波及とともにアジアの各地に流布し、それぞれの民衆にさまざまな影響を与えたことが知られている(筆者の『インドの説話』東京、昭38、pp.10-11. 参照)。特に、東南アジアにおけるラーマ伝説の文化史的意義は大きい。この『ラーマヤナ』のタイ伝本が『ラマキエン』(ラマの讃嘆)であり、現在では舞踊劇として著名である。

『ラーマヤナ』がいつタイに伝来したか、またラーマ(タイでは Phra Ram という)伝説がいつごろからタイ族の間に弘まったか、すべては不明である。しかし、ラーマ伝説の現在における影響は、他の東南アジアの諸民族に比べて、タイにおいて最も著しいことが知られている。まず、タイの現王朝の代々の王は Rama の称号を有して Phra Ram Djakri と呼ばれ、Rama の権化とされる。寺院の祭礼あるいは宮廷の祝宴に際して王が河を渡るとき、王は龍王 Ananta Nakharat (Skr. Ananta Nāgarāja) を像った船に乗り、王の旗には猿王 Hanuman (Skr. Hanumat) が描かれ、王の印章は鳥王 Khrut の姿を示している。いずれも Phra Ram を授けた英雄である。そのほか、王が行列に際して乗る車は『ラマキエン』に見られる天帝 Int (Skr. Indra) の楽園 Wechayan (Skr. Vaijayanti) の名で呼ばれるなど、タイの王廷生活は『ラマキエン』の伝統の中にあると言っても過言ではない。

『ラマキエン』の伝承はタイ族の日常生活の中にも生きている。タイ人の多くの者は Phra Ram 伝説に由来する名を持ち、親は子がこの伝説に登場する威力のある英雄の加護を受けることを期待する。また、巷間の言語表現に『ラマキエン』に関係するものが多い。例えば、腕白な子供は Thorapi あるいは Hanuman と呼ばれるが、これはこの伝説に登場する水牛あるいは猿王の名である。可愛らしい少女は Phra Ram の妃 Nang Sida (Skr. Sitā) に、力の強い若者は Phra Ram に、そして冗談を言う男は Phra Ram